

Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学, volume22, 2007.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3049
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

教育基本法が改訂されてしまった。私学人の中には、私学の振興・助成が條文（第八條）の中に盛り込まれたと喜んでゐる人々もいるが、それは單純に過ぎはしまいか。公共の精神、伝統の尊重、愛国心などが抱き合わせになつてゐる（第二條）ことに注意しなければならないだろう。

*

昨年十二月中旬に改定案が議会上程されたが、その直前、いくつかの不可解な事件があつた。「自殺予告」と「未履修問題」である。いじめを受けているので、生きてゆけない、自殺しますという伊吹文文科大臣宛て（ド）の手紙も、稚拙な文字と文章なのだ、宛て名の大臣名は正確である）の自殺予告書のコピーが各学校へファックスで送られてきた。東京都の場合、生活文化局私学部長名で「訴えてゐる子供を救えるのは学校ですので、適切に対応」してほしいと、数回にわたつて通知が来た。

同じ時期に、高校で世界史や家庭科が日本史や英語にふり替えられて教えられている、という「未履修」の摘発が始まつた。法令順守の建前から言えば褒められることでなく、また一部の高校に行き過ぎもあつたらしいのだが、しかしこの慣行は永年にわたつて行われてきたことで、行政当局は知らないわけではなかつたはずだ。それをにわか、火の見半鐘を叩くように、叩き出したのである。

都道府県教育委員会は文部科学省の督励を受け「調査」に乗り出し、「違反校」の校名を公表した。マス・コミは、行政の意図を察知できなかったのか、その路線に乗つて報道した。諸学校は当惑し、萎縮した。文科省は教育委員会の指導・監督機能の強化をアピールし出す。他方、「教育改革タウンミーティング」は内閣府の指導のもと

シナリオが作られ、演出されたものであることが暴露された（岐阜市、松山市、和歌山市、別府市など）。

十二月十四日、タウンミーティング調査委員会は調査報告を提出、政府は内閣府のタウンミーティング推進室の主要職員に対する処分を発表し、同室を廃止した。

*

以上は、教育基本法が改訂された時期に生じた出来事であり、いずれも納得しがたいものを含んでいる。なんと姑息な、国民を愚弄したやり方であろう。まるで江戸時代の山奥の小藩がやったであろう旧態依然のやり方である。鎖国時代の視野だ。

憲法前文に述べられている世界平和への寄与という理想は、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍」を起こしてはならないという決意に基づくものだ。これを「自虐史観だ」と言つた手合いがいたが、この種の論者がいつの間にかふえてきているのに気づく。ナショナリズムへの傾斜がかなり進行していると見なければならぬ。昨春秋、埼玉県下では教育委員会の指示により、小中学校の通知表に郷土愛や愛国心を評価する欄を設けるといつた事件も起きている。

*

「日本国民としての自覚と誇り」を強調することで、今日の教育が「再生」するなどととても思えない。「美しい日本を誇る」よりも、他国民を辱めた過去を素直に認め、他国民との協和をはかることの方が大事なのではないだろうか。今日、日本国に必要なのは民族意識の高揚よりも、「国際社会に名誉ある地位を占める」ことではないか。世界市民（グローバル・シティズンシップ）という理念と実践を教えることが、われわれの教育となるのではないだろうか。